

『うつほ物語』論

—— 仲介としての仲忠 ——

高 橋 悠

一 はじめに

『うつほ物語』における主人公仲忠はどのような存在なのだろうか。主人公と言えば『源氏物語』の光源氏に代表されるように、自身が話題の当事者となり物語を展開させてゆく人物である。しかし『うつほ物語』の仲忠を見ても、彼の活躍が描かれる際、仲忠が当事者となって物語に登場することはあまりない。仲忠は話題の当事者ではなく、話題の当事者たちを結びつける「仲介」として活躍が大きく描かれているのである。それが顕著に表れるのが「蔵開」巻と「楼の上」巻である。「蔵開」巻では父兼雅の妻妾である女三の宮を引き取るよう仲忠が働きかけ、見事女三の宮を引き取ることに成功する。また、「楼の上」巻では母俊蔭の娘から娘いぬ宮への秘琴伝授が円滑に行われるように、舞台設営などの裏方に徹する仲忠の様子が描かれる。

この仲忠のあり方についての先行研究は大きく二つあり、一

つは野口元大が「楼の上」巻の仲忠の仲介のあり方を論じたものである。^{注1}野口は秘琴伝授において、東の楼にいぬ宮、西の楼に俊蔭の娘、そしてその中間の反橋に仲忠が居場所を構えるという構図が、仲忠の仲介としての性格から意識的に配置されていると論じる。七夕の弾琴が仲忠のいる「渡殿」で行われていることも、「琴の秘蹟が現実界に顕現するためには、それは聖なる空間を出て、世俗との中間地帯において行われる必要がある」と述べる。二つ目は岩原真代が「蔵開」巻から「楼の上」巻の秘琴伝授までを仲忠の「しつらひ」という行為に注目しながら論じたものである。^{注2}岩原はまず兼雅や正頼の「しつらひ」は主に自家の欲望実現のためになされるのに対して、仲忠の場合は他者のために「しつらふ」例が多いと述べる。そして女三の宮引き取りにおける仲忠の献身ぶりについて、「仲忠は、まずは親族の内側から住環境を整えることによって、血縁関係にある氏族達の信頼を得、続く京極邸再興と秘琴伝授、俊蔭供養という俊蔭一族の悲願を叶える土壌を整備、構築していく」

と結論付ける。

以上のように、「蔵開」巻、「楼の上」巻における仲忠の仲介としての存在、また、それに伴う「楼の上」巻における仲忠の居場所の中間性は先行研究でも述べられているが、その考察が物語全体に及んでいないことが課題であると言える。そこで本稿では先行研究が触れていない物語前半や宰相の上物語における仲忠の仲介のあり方も含めて、仲忠の「仲介」という役割を考察する。また、岩原は仲忠の仲介が「俊蔭一族の悲願を叶える」ことに還元されていくと述べているが、それはあくまで結果から言えることであり、仲忠の仲介の目的が初めからそこにあったとは考えがたい。仲忠の仲介のあり方を、その目的も踏まえつつ物語全体を通して考察したい。

二 「俊蔭」巻の仲忠

本節では「俊蔭」巻において兼雅と俊蔭の娘を仲介する仲忠について考察する。「俊蔭」巻は兼雅の幼少期の若小君物語を軸に兼雅を中心にした先行研究が多いが、本稿では北山のうつほにおいて兼雅と俊蔭の娘を結びつけることになる仲忠に焦点を当てて考察を試みたい。

「仲忠」「この年ごろ、この山に籠り侍れども、かう尋ね訪はせ給ふ人もなきに、何ごとによりてか尋ねおはしまし

つらむ」と聞こえて、吾の上に出でたり。…「はかばかしくも、身の上を、え知り侍らず。①母に侍る人に、責めて問ひ侍りしかば、『父母に、一度に遅れ侍りにしかば、あひ顧みる人なくて、心細き住まひをし侍りけるに、はかなき人の、物の便りに立ち寄り給へりしになむ、いささかいらへなど聞こえしに、生まれにし』とばかり語られ侍れども、そも、はかばかしうも聞き侍らず」と聞こゆれば、ありし京極のことを、ふと思し出でて：「すべて見侍らず。母も、その人とは、え知り聞こえず。ただ、②『父母に遅れて、心細き住まひせしほどに、その時の大臣、家の前より賀茂に詣で給うたりしかば、見に、端に出でたりしに、おほえぬ人に見合はせ聞こえたりしかど、年返るまで知らざりしに、今思へば、今日明日になりけるに、そこなりし人の、『さることあめり』と教へしをなむ聞きし。その後、その人、影にも見え給はずなりにき。いと憂きことなれど、『我なくなりなば、聞き置け』とてなむ』と申さるる。されば、すべて、え知り侍らず」と聞こゆるに、悲しうあはれに思さるれど、気色にも出だし給はず。(俊蔭・四五―四七)

右は兼雅が琴の音を頼りに、北山のうつほを訪ねる場面である。兼雅は仲忠に対してなぜこのような山奥にいるのかと尋ねる。仲忠は自分の出自について詳しくは知らないのだと返すが、一方で、傍線部①②にあるように、母俊蔭の娘の言葉を用

いて自分たちの状況を説明している。そして兼雅は、仲忠の口から俊蔭の娘の言葉を聞くことで、二重傍線部のように過去の京極邸での逢瀬とここに住む人間との関連性に気付くのである。仲忠と対面したことだけでは思い当たらなかったが、仲忠の口から俊蔭の娘の言葉が語られることにより兼雅は「ありし京極のこと」を思い出した。この兼雅の一度目の来訪場面では、俊蔭の娘は表向きには登場しないが、仲忠が母俊蔭の娘の言葉を使って兼雅と会話をするので、仲忠が媒介となって兼雅と俊蔭の娘の二人が結びつけられていることが分かる。こうして仲忠は仲介として機能し始めるのである。

次の場面は、兼雅に山を出ることを勧められた仲忠が母俊蔭の娘と相談の末、山から出ないことを兼雅に告げる場面である。

「この、もてわづらひ侍る人、『今更に、なでふ世づいたる目を見む。山の見る目も、恥づかし』とて、動きげも申さねば。一人は、また、何の効も侍らじ」と言ふほどに
：（俊蔭・四八）

「山を出ない」という決断は仲忠の意志に俊蔭の娘が任せたものであるが、仲忠の意志は母の言葉を汲んだものである。俊蔭の娘は、下山後の都での扱いへの不安とともに、それも仕方のないことと半ば諦めるような気持ちを持っていた。すべては仲忠の心次第だと促された仲忠が山に留まる決断をしたのは、俊蔭の娘が大きく影響していると見ることができる。そして、兼

雅に返事をする際も俊蔭の娘の言葉として取り次ぎ、仲忠は仲介としての姿勢を崩さない。仲忠は兼雅と俊蔭の娘の間に立ち、母俊蔭の娘の言葉、そして心情を代弁することによって二人のコミュニケーションを支える仲介となるのである。さて、俊蔭の娘と仲忠を山から連れ出すことができなかった兼雅は、諦めず再度訪問する。そして二度目の訪問時、兼雅の「汝は、え知らじ。君に対面せむ」（俊蔭・五〇）という仲忠への言葉があり、俊蔭の娘と兼雅は直接対話することになる。これは前回仲忠が兼雅に「ありし京極のこと」を思い出させたことにより実現したものであり、仲忠の仲介があつてこそこの場面において当事者同士の対話という状況が生み出されたのだと理解できる。

〔兼雅〕「…この日ごろのほどだに、魂の静まる方なく思ひ焦られつるを。はや、聞こえそそのかせ。年ごろ、知らで惑はかしつるも、わが罪にあらず。そも、親に従ひしなり。今は、『孝ずる』と思ひて、出だし奉れ」とのたまへば、子も、かくのたまふをかたじけなく、いづれも同じ親なれば、さる孝の子の心にて、母に、「かかかるあさましき所にだに、いときなき身一つを頼みて入り給ふに、今は、また、出で給はむことも、『おのれがゆゑ』と思せ」と、切に言ひ…（俊蔭・五一）

下山しようという兼雅の強い説得が続くも俊蔭の娘は思い悩む

ばかりである。そのような俊蔭の娘を見かねた兼雅は、今度はそれまで静観していた仲忠に語りかけていく。傍線部にあるように、兼雅は仲忠に対して俊蔭の娘を説得して連れ出すよう強く呼びかけるのである。仲忠は兼雅が実の父であると気付いたからこそ「いづれも同じ親なれば」と思つて母俊蔭の娘に共に山を出るよう呼びかける。結局、仲忠の呼びかけもあり俊蔭の娘の思いが大きく揺れ始めたところを、最後は兼雅が強引に出立させ、俊蔭の娘親子は都に迎えられることとなった。この一連の場面を通して、仲忠は兼雅と俊蔭の娘という人と人となつなく仲介の役割を担っていることが確認できた。そして、仲忠が説得し俊蔭の娘の心情に揺らぎを与えたように、仲忠はただ人と人との間に立つだけでなく「説得して動かす」という働きも仲介としての役割に付属していると考えられる。また、仲介として動く上での仲忠の居場所についても詳しく見ていきたい。始めに、北山のうつほの有り様を確認する。

そのかみ、この木のうつほを得て、木の皮を剥ぎ、広き苔を敷きなどす。(俊蔭・三九)

この木の前には、よろづの木なつかしう、苔を敷き、砂子を蒔きて、清げなる蔭に立ち寄りて、声作り給へば、このうつほの人、琴を弾きやみて、あやしがりて見給へば、いと清げなる人立てり。(俊蔭・四四)

仲忠と俊蔭の娘の住むうつほの前には「苔を敷いた空間」が存在していた。さて、ここでまず北山における「外」の概念について述べたい。山は都から見れば「外」だが、うつほという異空間を中心に考えたとき、山はうつほという異空間の外、つまり北山の日常的な空間と言うことができる。そう考えたとき「苔を敷いた空間」は、山とうつほの中間に介在することで、うつほという異空間と山という日常をつなぐ役割を果たしている。二つの世界に接しているという点では、寝殿造において邸の外である簀子と、邸の内である母屋との中間に位置する「廂」と同様の場であると考えられる。北山のうつほの「苔を敷いた空間」に見られる中間的な場所の意味を踏まえながら、兼雅が初めて訪ねてきた先の引用箇所を見てみよう。仲忠は苔の簾の内にいるときも簡単な受け答えはしていたが、兼雅に対して俊蔭の娘の仲介として機能し始めるのは「苔の上」に出て以降である。仲介という二者の間を取り持つ中間的な役割が、仲忠の立ち位置である「苔の上」という「異空間と日常のどちらにも接した中間的な場所」によつても示されていると考えられるのである。先行研究が指摘していた「楼の上下」巻の秘琴伝授だけでなく、物語冒頭から、仲忠の仲介という役割が、仲忠の居場所によつて明示されているのだ。

仲忠はやむを得ない状況において、「苔の上」にて兼雅と俊蔭の娘の仲介役を引き受けた。また、兼雅の二度目の訪問では兼雅の要請を受けて仲介を引き受けている。このような状況から仲忠が「仲介」という役割を積極的に見出し、そして主体的

認していく。

大将、「内裏にも、いとかしこく嘆かせ給ふめる。そのことによりては、あぢきなく、殿にも仲忠らも、いと苦しき仰せ言なむ。なほ、かの宮訪ひ聞こえさせ給へ。それによりても、いとほしく思されたりき。」…〔兼雅〕「いかで。ここは、この御料に奉りたる所に、人のものし給はむこと、本意違ひたるやうに。年ごろ、いみじう愛しかりし心ざし、また人なくて心安くてあらむをだにこそ」…おとど、「ここには知らず。二所の御中に、よろしかるべく定めて」。(蔵開中・五六〇)

生じ、仲忠がただ「仲介」に奔走する様子がここでは描かれる。「子」として仲介を与えられている間は、その遂行こそが目的となるのである。つまり、その仲介が何を目的にしているのかということよりも、成し遂げることが重要視されているのである。

三 「蔵開」巻の仲忠

「蔵開」中・下巻において大々的に語られるのが兼雅の妻妾である女三の宮を三条殿に引き取る物語である。「俊蔭」巻において俊蔭の娘と仲忠を迎えたことで断絶した女三の宮と兼雅の関係を仲忠がどのように仲介していくのか、まずは本文で確

兼雅と対面するまで、仲忠は俊蔭の書を講書するために朱雀帝や東宮らと内裏に籠っていた。その中で仲忠は朱雀帝が「など、皇女たち、かくのみあらむ。女三の宮も、いとあはれにてもせらるなり。」(蔵開中・五三九)と、兼雅に見捨てられている女三の宮の現状を嘆き、また、あて宮ばかりを寵愛して他の后たちに見向きもしない東宮を諫める発言を聞いていた。その両場面に仲忠の言葉や様子は描かれませんが、仲忠は父兼雅を思い浮かべていたはずだ。だからこそ、女三の宮を訪ねることを提案し、自分たちの住む三条殿に引き取るよう説得するのである。それに対して兼雅は、三条殿に女三の宮を引き取ることは「本意違ひたる」と強く反発するが、仲忠の説得と俊蔭の娘の許しにより、半ば放棄するように女三の宮引き取りを了承する。

大将、「『その日ばかり、御迎へせむ』と、御文を書きて賜へ。持て参りて、くはしく聞こえむ。おとど、「なほ、まうでて申されよかし。ここには、何ごとをかは」。大将、「いと便なきこと。いかでか、御文なくては」とて、御硯・紙など取り賄ひて奉り給へば、「何ごとをか書くべき」とて、いと久しく思ひつつ書き給ふ。「いさや、かやうにぞ。物おほえずや」とて見せ給ふ。見れば、「年ごろは」と聞こえさするも、「いかでなりにけるにか」と思ひ給ふる、あやしくなむ。：『ことごとには、この朝臣、聞こえさせ承れよ』となむ」などあり。(蔵開中・五六二)

女三の宮引き取りに反対する兼雅を説得した仲忠は、続いて女三の宮へ迎え日を記した手紙を書くよう要請する。そして、それを自分が女三の宮のもとへ持って行き詳しく話すと言う。ここで仲忠は二人の仲介を引き受けると買つて出るのである。手紙を書くことも渋る兼雅であったが、ここでも仲忠が強く言うことで、ついに兼雅に手紙を書かせることに成功したのである。また、兼雅の手紙の中でも仲忠が仲介をする旨が示され、この場面では自他ともに「仲忠の仲介」が意識されていると見ることが出来る。引き取りを拒否していた兼雅を説得し、引き取りの手紙を書くよう動かすことに成功した仲忠には、第二節で確認したように「説得して動かす」という仲介としての特性を見出すことができる。

「右大将の君こそおはしたれ」と、宮に聞こゆれば、「あなおほえず。なでふ道惑ひぞ」と言はせ給へれば、「大殿の御使にて、取り申すべきこと侍りて」と申させ給へば、**南の廂**に、御座・褥など敷きて、よき童出で来て、「こなたに入らせ給へ」とあれば、入り給ひぬ。大将、「『しばしば』と思ひ給ふれど、騒がしく侍りつつなむ。今日は、『この御文、人して奉れば、おほめかせもぞし給ふ。しるく御覽ずばかりも、持たせて参れ』と侍りつれば」とてなむ参らせ給ふ。宮、「げに、かかる御使なくは、え思ひ出づまじくこそは」とて見給ひて：(蔵開中・五六三―五六五)

右の引用は、仲忠が兼雅の手紙を持参して女三の宮のいる一条殿を訪れる場面である。仲忠は一条殿を訪れ、自分は二人を取り次ぐ仲介の立場であるとして「取り申す」と言い、あくまで「御使」であるということ述べる。また、傍線部にあるように、自分でなければ女三の宮と兼雅を取り持つ仲介はできないということを、兼雅の言葉を使いながら示している。それを受けて女三の宮も「仲忠でなければ思い出せなかつた」と言い、仲介としての役割を強調する。そして、兼雅の時と同様にここでも仲忠は手紙という物を残すことをことさら大事にし、返事の手紙を渋る女三の宮をほぼ強引に説得し手紙を書かせるのだ。兼雅に対しても女三の宮に対しても「手紙」という物にこだわる仲忠には、どのような意味があるのか。武藤那賀子はこの場面

の手紙について「本人直筆の文が、仲忠が女三の宮を訪ねた証明になると同時に女三の宮が兼雅からの文を読んだことの証明にもなり、また、女三の宮自身が返事を書いたことの証明にもなっている」として、差出人と受取人を特定する重要性が示されていると論じる^{注5}。もちろん首肯すべき論であるが、本稿では手紙という存在が、仲介としての仲忠にどのように影響しているのかを考えたい。ここで両者をつなげるため手紙を介在させることは、武藤が述べるように物証となるだけではなく、仲忠自身の仲介としての働きを根拠づけるものでもあると私は考える。また同時に、この短い場面において、仲忠を指す「御使」という言葉が集中的に用いられていることも注目に値する。手紙を運ぶ「御使」は当事者間の仲介として機能するものであり、この描写もまた仲忠を仲介たらしめるものである。つまり、この場面において仲忠の仲介という役割が物語として大きく打ち出されていると言える。

かくて、三条殿に帰り給ひて、宮の御文奉りて、「のたまへるやう、かうかう」など申し給へば：大将、帰り給ひぬ。
：〔兼雅〕下心地には、「悪し」とも思さざりけり。（蔵開中・五六六―五七一）

兼雅に女三の宮の様子を報告する際も、女三の宮の言葉を用いながら説明している。「俊蔭」巻と同様に、当事者の言葉で伝えることで兼雅と女三の宮をつなぎ、自身は仲介役であるとい

う立場を崩さない。仲忠は決して当事者にはならないのだ。そして、当初女三の宮引き取りに反対していた兼雅の心境が動き始めていることも示され、仲忠の仲介が成功の兆しを見せるのである。

〔兼雅〕「…行く先も短くなりぬる心地し侍ればなむ、『海人の苦屋のやうなる所に、時々、通ひおはしましなむや』と聞こえたりし」。宮、さらに、「年ごろ見ざりつる」とも思したらで、いとおいらかに、「世の中は、いとよく、かくてもありぬや。…されば、『今は、ともかくもしなし捨てられなむまにを』となむ、一日、中納言にもせし」とのたまふほどに、おとどの御前に、昔のやうにて御台参れり。多くの御物語し給ふほどは、右大将、少将の妹の方におはして、簀子のもとに立ち給へり。（蔵開下・五八九）

これは女三の宮を迎えるために兼雅が一条殿に赴き、女三の宮と兼雅という当事者同士が対話の果たず場面であるが、傍線部にあるように仲忠が仲介として女三の宮のもとを訪れた日を中心に話題が展開されていることに注目したい。最後に「多くの御物語し給ふ」とあることから二人の間では様々な話がされているようだが、ここで物語がことさらに強調しているのは仲忠の仲介なのである。当事者二人の対話の実現にあたって、仲忠の仲介がいかに重要だったかということを示し、その功績を強調していると言えよう。この後兼雅は女三の宮を三条

殿に迎えることになり、女三の宮引き取り譚は終了する。仲忠が二人を取り次ぎ、兼雅と女三の宮を説得し動かすことで仲介は成功に終わったのである。

嵯峨の院、「さ聞き侍りき。三の内親王のもとに、訪ひにものして侍りしかば、頼もしげなくものして侍りしを、殊なることもなくものせられけるを喜び侍る」。朱雀院、「いみじう侍りけるを、からうして仲媒して侍る」(国譲下・八一七)

その後、女三の宮の父嵯峨院も仲忠を眺めながら女三の宮引き取りについての喜びを述べる。そして朱雀帝は仲忠が「仲媒」として尽力したと話す。このように、仲忠の仲介は兼雅や女三の宮などの当事者だけでなく、嵯峨院など周囲にまで広く知れ渡り、称賛されていくのである。

また、第一節と同様に仲忠が仲介をする居場所についても確認したい。先の本文引用箇所を参照すると、仲忠が兼雅の手紙を持って女三の宮のもとを訪れる場面において、仲忠は廂に通されている。一般的に、寝殿造は最も内側に母屋、その周りに廂が存在し、廂のさらに外側に簀子が存在する。外を見晴らすことのできる完全なる外としてある簀子と、多くの簾や几帳などで遮られた先にある完全な内としてある母屋との間にある廂は、どちらにも接しているが同時にどちらでもない場所で、寝殿造の構造上中間的な場所である。また、それとともに、外か

ら訪れる男君にとっては、簀子より一段母屋の女君に近い場所として意識された特殊な空間でもある。男女の対面場面における男女の位置関係を『うつほ物語』がどのように記しているのかをまず簡単に説明したい。母屋の女君を外から男君が訪ねる際、多くの場合男君は簀子に通されている。男女が婚姻関係にあれば同じ部屋で会話をしたり、また女君の親族であれば廂に入ることはできても、何の関わりも持たない男女が会話をする場合、男君は外の簀子なのである。簀子に男君、廂に女房、母屋に女君がいるという構図は、物語前半の求婚譚においてだけでなく、この物語全体で通例となっているのだ。そのような中で仲忠が皇女である女三の宮と対話をする際に廂に通されているのは、仲忠が仲介としてこの場面で機能しているということとその居場所から示しているのではないか。廂の持つ中間的なイメージは、女三の宮と兼雅をつなぐ仲介としての仲忠の役割と関連付けられていると考えられる。また、容易に男君が入ることのできない廂という場所に通される仲忠には、女三の宮との心の距離の縮まりを予感させるとともに、兼雅と女三の宮を結びつける仲介という役割への期待感も表れていると見ることができると。

仲忠は「葦間」巻の仲介において朱雀帝の意向を受けて兼雅に女三の宮引き取りを提案した。仲介のもともとの始まりは「俊蔭」巻同様他者であり、また、父兼雅が動かないという状況も相まって、自ら仲介を行使したとは言いがたい。仲介という役割を他者から与えられており、「子」としての仲介であると

言える。子が親に庇護されるように、仲忠の仲介という役割も他者から与えられることで庇護され、自身の役割として成立するのである。しかし、同じ「子」としての仲介であっても、「俊蔭」巻と「蔵開」巻とは差がみられる。仲介のきつかけとしては他者にあるが、そこから主体的に動き、また自分を仲介として自覚し積極的に動いていく「蔵開」巻の仲忠のあり方は、「俊蔭」巻から大きく発展していると言えよう。また、「蔵開」巻の仲忠の仲介の目的も考えたい。兼雅と女三の宮を仲介したことで、多くの人々との結びつきの獲得、強化につながり、その結びつきは藤原家として都で生き抜く上での人脈になり、また、「楼の上」巻における秘琴伝授・披露にも大きく影響することになるのだが、これは結果に過ぎない。岩原真代が、仲忠の無私の献身ぶりは「京極邸再興と秘琴伝授、俊蔭供養という俊蔭一族の悲願を叶える土壌を整備、構築して^{注6}いく」と述べていることもあくまで結果から言えるものであり、そもそも仲忠が目的として据えていたかは不明である。明確に言えることは、「俊蔭」巻と同様に、与えられた仲介の役割を遂行することが、ここでも大きな目的になっていったということではないか。

「蔵開」巻は仲忠が自身の役割を意識し、周囲の登場人物、物語読者にも仲忠の仲介としての姿を認知させていくことに主眼が置かれていたと考えられる。「俊蔭」巻で獲得した仲介という彼独自の役割が、「蔵開」巻において確実に成立し、「仲介としての仲忠」を物語の中に定着させるのである。主人公の仲忠は物語冒頭で「仲介」という異例とも言える脇役的な役割を

獲得したが、この役割を行使し、そして認知・称賛されていく姿を描くことで、今後仲忠が仲介役の主人公として物語を生き抜いていく方向性を強く示すのである。また「子」としての仲介ではあるが、「蔵開」巻では発展も見せた。「俊蔭」巻では兼雅が仲忠を「あこ」と呼んだり、親としての立場を主張したり、本文においても仲忠は一貫して「子」と記されているが、「蔵開」巻の場合は、兼雅が「子の仲忠の朝臣、子に侍れど、親になむし侍る」（蔵開下・六一二）と述べる場面も見られる。実際「蔵開上」巻でいぬ宮が生まれ親となった仲忠は「子」としての立場が徐々に揺らいでいく。この揺れは、仲忠の仲介が「子」として役割を与えられその遂行を目的とする今のあり方から、仲忠自身の明確な目的を持ったものへと今後発展していく未来を予感させるのである。

四 「宰相の上物語」の仲忠 揺れる仲介

本節では秘琴伝授の物語に入る前に、まずは「楼の上上」巻冒頭にて突如として語られる宰相の上とその子、小君にまつわる「宰相の上物語」の存在意義を、仲忠の仲介という役割から考察したい。宰相の上物語の語り始めは「蔵開下」巻にさかのぼる。「蔵開下」巻では去って行った兼雅の妻妾たちが一条殿に歌を書き残していた様子が語られていた。「楼の上上」巻冒頭は、その歌の中で宰相の上の歌が兼雅の目に留まり、宰相の上に思いを馳せる場面から始まる。俊蔭の娘はまたみまで集

まづ暮らすことを兼雅に提案し、仲忠に宰相の上探索を依頼するのである。「俊蔭」巻、「蔵聞」巻と同様に仲忠が他者から依頼を受けることで、仲忠が兼雅と宰相の上との間に立ち、仲介として働く姿を予感させながら物語は展開していく。仲忠は物忌みとして石作寺に詣でた際に偶然宰相の上、また兼雅との子である小君と出会う。小君の登場によつて、母子流離譚としての「俊蔭」巻における仲忠と俊蔭の娘が想起されていることは先行研究でも述べられているが、兼雅が母子を発見した「俊蔭」巻と、仲忠が母子を発見した「楼の上」巻を比較すると、物語の構図という点では、「俊蔭」巻の兼雅と「楼の上」巻の仲忠が重ねられていると言える。ここで注目したいのは、本来仲介という役割を担って宰相の上と出会ったはずの仲忠が、「俊蔭」巻の兼雅という当事者の存在と重ねられていることである。この類似関係は構図だけにとどまらない。この後仲忠は子である小君を招き寄せて母の存在や子の出自、父の存在を尋ねる。この場面はまさに「俊蔭」巻での兼雅と仲忠のやり取りを彷彿とさせる。この二つの場面の類似性については富澤萌未が詳しく比較しているが、以上のようにこの場面の仲忠は父兼雅という当事者自身になりうる描写がなされているのである。しかし、これに続く場面では、仲忠は兼雅に宰相の上の状況を伝え、引き取ることを決める兼雅を母俊蔭の娘とともに説得する様子が描かれる。そして結局兼雅はその力強さに負けて了承するのだ。この様子から、仲忠が仲介としての働きを放棄したわけではないことが分かる。宰相の上との出会いの場面では、父

代行ではなく父という当事者になりうる可能性を予感させながらも、仲忠が仲介として動く場面は描かれているのだ。このように仲忠のあり方が揺れ動く中で、ついに重大な事件が起こる。

東の方に寄りたる格子の二間ばかり上げためり。未申の外より見入れ給へば、中の障子も毀れたり。南の簀より上りて覗き給へば、東の妻戸の簾上げて、人もなしめし居たり。母屋の方の柱に、いと濃く黒き桂の艶やかなる一襲、薄き縹の綾の張綿重ねて着て居たる人の、髪、糸を繕りかけたるやうに艶やかに長げなり。額に懸かれるほど、いとうつくしげなり。(楼の上上・八三五)

迎への前日、兼雅の意向を伝えるべく仲忠は宰相の上の邸を訪れるが、そこで仲忠は宰相の上を垣間見し、美しさに目を奪われる。もちろんこの後仲忠は宰相の上へ兼雅の意向を伝え、三条邸に来るよう説得するのであるが、帰邸後も懸想じみた歌を宰相の上へ贈っている。翌日、仲忠は宰相の上の様子や意向を兼雅に報告はするも、垣間見をしたことや歌を贈ったことを伝えることはない。仲介としての役割を果たしながらも仲忠は宰相の上との間に兼雅を経由しない関わり、つまり私通が生じていることが分かる。仲忠に当事者としてのあり方が生じ、仲介という役割が揺らいでいるのである。この揺れには、宰相の上の物語において特徴的である「宰相の上・仲忠・小君」間の仲忠の存在の両義性や混同、つまり、小君の「父」と宰相の上の「子」

として描かれる仲忠が表れていると考えられる。

③大将、膝に据多給ひて、「母君は、ここにか」とのたまへば、「おはすめり」。「誰が御子ぞ」。「知らず」。「御父は、誰とか、人は聞こゆる」。「『右の大将』とかや、人は言へど、まだ見え給はず。呼ぶなり。まうでなむ」とて立ち給ふ。

(楼の上上・八三〇)

④立ち返り、「心憂く、もて離れては思されじものを。『今よりは、親などこそ頼み聞こえさせむ』と思う給へらるれ。いとまめやかに、年ごろ、『いかでものせさせ給ふらむ』と嘆き聞こえ給ひて、『思ひのほかならぬ御様にてもものせさせ給はば、御迎へも、いかでか』などなむ聞こえ給ふ。』

(楼の上上・八三二)

⑤小君には、「まろが弟におはしけれど、子のやうに思ひ聞こえむ」など、いとよう語り聞こえ給ふ。(楼の上上・八三二)

⑥かくて、参り給ひつれば、若君の、この殿をば、「父ぞ」とて、むつまじう纏はし奉り給ふ。居給へる所にも、いと近うむつれ居給へり。殿をば、「殿」と聞こえ給ひて、殊にむつれ聞こえ給はず。(楼の上上・八四一)

仲忠と宰相の上、小君との関わりを示す部分の中から仲忠の属性を示す四つの場面を引用した。③は本節冒頭でも確認した場面である。小君に出自を問い呼び寄せて膝に据える仲忠には、「俊蔭」巻の兼雅との類似性が認められ、小君の「父」としての存在が見出せる。④は石作寺において宰相の上と手紙を交わした際の仲忠の言葉であり、ここからは宰相の上の「子」としての仲忠の存在がうかがえる。⑤は④の後に、仲忠が小君に語りかける場面である。仲忠は自分の弟であるが、自分の子のように思おうと言う。ここにおいて仲忠は宰相の上の子としての存在と、小君の親としての存在を自ら背負い、物語としても父と子という仲忠の存在の両義性を描くのである。⑥は小君と仲忠、兼雅の関係性が語られる場面だが、小君が仲忠を「父」として慕い、実父である兼雅に対しては特になつていないと記される。ここは先行研究において小君と宮の君との比較から小君が清原氏の学問を受け継ぐ伏線となること、琴の一族から排除される兼雅と宮の君の結びつきなどが述べられているが、^{注9}文脈からは仲忠が小君の「父」として存在していることがわかる。

以上のように、仲忠は「宰相の上―仲忠―小君」という関係性において一方では「子」として描かれ、もう一方では「父」として描かれ、さらには一つの場面に「親・子」の役割がないまぜに描かれることすらあった。ここでは「親」と「子」という役割が場面場面でまちまちに付加されるがゆえに曖昧で揺れのある仲忠の存在が、続く秘琴伝授の仲介の在り方への橋渡しし

になっているのではないかということを考えたい。仲忠が当事者のような動きをすることで、宰相の上物語ではこれまで見てきた仲介としての役割に揺れが生じた。この揺れは、続く秘琴伝授において、仲忠の仲介が新たな発展を遂げることを意味している。それは、宰相の上物語において揺れていた仲忠の存在に象徴されるように、仲忠の仲介が新たに「親であり子」である仲介へと発展するということだ。「子」として今まで仲介をしてきた仲忠は、ついに秘琴伝授においていぬ宮の親として俊蔭の娘との仲介役を担う。その仲介のあり方への過渡期的場面として宰相の上物語があるのではないか。仲忠の存在が「親」と「子」で揺れ、仲介という役割それ自体も揺れるという場面を挟むことで、「蔵開」巻までの仲忠の仲介のあり方から「楼の上下」巻の秘琴伝授における仲忠の新たな仲介のあり方へと、スムーズに橋渡しができるのである。

五 「秘琴伝授物語」の仲忠

野口元大が述べるように、秘琴伝授において、仲忠はいぬ宮のいる東の楼と、俊蔭の娘のいる西の楼の中間にある反橋を居場所にし、そこで俊蔭の娘といぬ宮の仲介をしている。つまり、仲忠の仲介という中間的な役割と反橋という中間的な場所がリンクして描かれている。また、秘琴伝授の終盤、七夕での弾琴による奇瑞が生ずる場面は「渡殿」という仲忠の居場所で行われていることもあり、この場所において仲忠が俊蔭の娘といぬ

宮をつないでいるという指摘は野口だけでなく倉田実の論にも見える。^{注11}そして野口はこの七夕の場面において秘琴伝授が完了したと述べ、それは奇瑞という人間の琴と自然の交感状態により裏付けられるとする。戸田瞳も野口の論を受けて、ここでは秘琴伝授完了の祝いとしてはし風・なん風を俊蔭の娘が弾琴している^{注12}と述べており、これらは傾聴すべき論である。本稿では秘琴伝授の過程において、どのように仲忠が俊蔭の娘といぬ宮をつないでいるかを確認した上で、俊蔭の娘といぬ宮が七夕の弾琴でいかにして結び付いたかという^{注13}ことを考察したい。まず、仲忠の仲介において今までの巻と異なる様子が示されていることに注目する。それは仲忠の仲介の目的が明確化されているということである。仲忠がいぬ宮と俊蔭の娘を仲介するにあたり、従来のように誰かに命じられたり、諭されたりしたわけではない。女一の宮や俊蔭の娘に自らいぬ宮への秘琴伝授を提案し、そしてその場所として京極邸の再興を指示しているのである。また、秘琴伝授は母俊蔭の娘が思い悩んでいた俊蔭供養にもつながる。都から離れた京極邸は仏道修行に何よりの場所であり、不遇の死を遂げた俊蔭の鎮魂を果たす可能性を大いに秘めているからである。仲忠も俊蔭供養については「『さるべき昔の御ためのことどもも、いかでか』と思ひ給ふる」（楼の上上・八五〇）と述べ、俊蔭の娘の「子」として母の思いを汲みながらも、俊蔭供養を自身が果たすべきものとして据えている。仲忠はいぬ宮への秘琴伝授、そして俊蔭供養を「一生の大きな大事」（楼の上上・八五〇）と述べる。仲忠はこの大き

な目的に向かつて、以降いぬ宮の「親」かつ俊蔭の娘の「子」として動いて行くことになる。

「琴習はせ給はば、宮には聞かせ奉らでなむ習ひ給ふべき。いと面白うをかしき所に率て奉りてむ。尚侍のおとはおはしましなむや」とのたまへば、「さりとも、宮おはせでは、いかでか」とのたまへば、「いとくちをし。さては、不用に侍なり。人に聞かせて、仲忠・尚侍のおとどなむ、人に教へ侍る。しばし念じ給ひておはしませ。さて、よく弾き取り給ひてむほどに、宮はおはしましなむ」と聞こえ給へば、「さらば、よかりなむ。などて、宮には隠し給ふぞ」。(楼の上上・八六一)

〔いぬ宮〕「宮のも、かくやあらむ。宮見奉り給へるか。『恋しうとも念ぜよ』とのたまひしを、今は忘れやし給ひぬらむ。御文も賜へかし」とのたまふままに泣き給ひぬべければ、「な泣き給ひそ。御文侍り。それには、『よく習ひ給ふや。今は、さらば、渡り給ひて見奉らむ』となむ侍りつる」と聞こえ給へば、「いとうれし」と思ひ給ひて、いとうよう弾き給へり。(楼の上下・八九一)

仲忠は秘琴伝授において母女一の宮と離れることを不安がるいぬ宮を説得する。その際に用いるのは女一の宮の行動や言葉であり、いぬ宮の心理的な不安を女一の宮の存在で解消し、いぬ

宮の意識を秘琴、つまり俊蔭の娘へと転換させている。いぬ宮が母恋しさに琴から心が離れそうになると、仲忠は女一の宮の言葉を使い、女一の宮の存在をほのめかしながら意識を琴へと向かわせる。仲忠は親として、子であるいぬ宮を気にかげながら俊蔭の娘と結びつけるのである。従来通り仲忠の仲介という役割には、当事者を「説得して動かす」力があるのだ。また、実際の秘琴伝授の場面でも、俊蔭の娘がまずは琴の手本を見せ、その後仲忠がいぬ宮へ琴を手渡し、弾いてみるように促す描写があり、仲忠を経由して俊蔭の娘からいぬ宮への秘琴伝授が行われていることが分かる。そして、このように仲忠が二人の仲介に励むことで、次第にいぬ宮と俊蔭の娘二人の会話が描写されるようになる。

〔いぬ宮〕まろが弾くうらやましとや琴の上に楓も
とばかり、「恥づかし」と思ふ」とのたまひて、末ものた
まはぬを、尚侍の殿、「いかにか。なほのたまはせよ、の
たまはせよ」とて、「かかか音を弾かむ」とのたまはず。(楼
の上下・八九二)

〔俊蔭の娘〕山は冴え河辺の氷雪凍みて涙の雨と降り
し宿かな

とおほえ給ふを、いぬ宮、「な泣き給ひそ。まろも念じてこそあれ」と聞こえ給へば、おとど、「宮をば、いと恋しうや思ひ聞こえ給ふ」。(楼の上下・八九五)

それまでほぼ二人の会話が描写されないことを鑑みると、恥ずかしがるいぬ宮をからかう俊蔭の娘や、過去に涙する俊蔭の娘を慰めるいぬ宮の描写は、俊蔭の娘といぬ宮という当事者間の心の近づきを表す。また、それと同時に当事者間での会話がなされることで仲忠の仲介が成功の兆しを見せていることをほめかし、今後の秘琴伝授の達成をも示唆していると考えられる。このような段階を経て、七夕の弾琴において俊蔭の娘からいぬ宮への秘琴伝授は完了されるのである。

かの木のうつほに置き給うし南風・波斯風を、我弾き給ひ、細緒をいぬ宮、龍角を大将に奉り給ひて、曲の物ただ一つを、同じ声にて弾き給ふ。世に知らぬまで、空に高う響く。…さまざまに面白き声々のあはれなる音、同じ声にて、命延び、世の栄えを見給ふやうなり。…夜いたう更けぬれば、七日の月、今は入るべきに、光、たちまちに明らかになりて、かの楼の上と思しきにあたりて輝く。神遙かに鳴り行きて、月の巡りに、星集まるめり。世になう香ばしき風、吹き匂はしたり。少し寝入りたる人々、目覚めて、異ごとおほえず、空に向かひて見聞く。楼の巡りは、まして、さまざまに、めづらしう香ばしき香、満ちたり。三所ながら、大将おはする渡殿にて弾き給ふなり。(楼の上下・九〇四)

戸田は一年の四季の移り変わりが果たされたとして七夕の弾琴

を秘琴伝授完了場面であると位置づけたが、^{注13}奇瑞の描写からも秘琴伝授の達成を確認することができる。琴の一族の奇瑞のあり方は、俊蔭と仲忠が地震や荒天などの破壊的なもの、俊蔭の娘が長寿や繁栄などの平和的なものである。七夕の弾琴での奇瑞は、傍線部のように俊蔭の娘の奇瑞の持つ特性が顕著に現れていると言える。そして重要なのが、琴の音が「同じ声にて」と繰り返し述べられていることである。ともに弾琴するいぬ宮にも俊蔭の娘の琴の音が継承され、いぬ宮もまた奇瑞を生じさせる人物の一人であることを明らかにしている。こうして秘琴伝授は完了し、その証としていぬ宮は秘琴一族の「変化の者」という称号を手に入れた。前述したようにこの二人の結びつきは仲忠の仲介があつてのものである。「渡殿」で開催された七夕の弾琴は、いぬ宮への秘琴伝授完了を物語るとともに、二人を結びつけた仲介としての仲忠の役割がついに果たされたということを強く示しているのである。そしてこの秘琴伝授の達成により、もう一つの目的である俊蔭供養が果たされたことは言うまでもない。その日の俊蔭の娘の夢に俊蔭が現れるのである。俊蔭は琴の音が継承され趣深く演奏されていたこと、また俊蔭の娘の子である仲忠の姿がすばらしかったことを語った。俊蔭の娘は俊蔭について、自分のことで多く悩み、また、子の仲忠の姿も見せられなかったと後悔の念を述べていた。俊蔭の娘の懸念事項として念頭にあったことがこの秘琴伝授において達成され、それに呼応するように俊蔭も姿を現す。俊蔭の鎮魂が同時に果たされていく様子がここで描かれているのである。

六 おわりに

仲介において「子」と「親」のあり方の違いは、仲介の根本がどこにあるのかだと考えられる。「俊蔭」巻や「蔵開」巻ではやむを得ない状況や他者からの依頼で仲忠は仲介を担うことになった。「蔵開」巻では仲忠が積極的に仲介を引き受けて自ら動いていたとは言え、仲介のもともとの始まりは他者の言葉や状況であった。「子」として仲介をしている間は、仲介という役割を与えられており、だからこそ、その遂行が大きな目的となる。しかし、それと一線を画す「楼の上」巻における「親」としての仲介は、庇護下を脱し、自ら「秘琴伝授」という目的を持つて提案・実行することで、仲介という役割を自ら確立していく。もちろん仲忠は俊蔭の娘の「子」として、俊蔭供養という俊蔭の娘の思いを受けてもいるが、これは従来のように、仲忠の仲介という役割を庇護されるために与えられたものではない。ここでは仲忠自身にも俊蔭の娘と同様に俊蔭供養という目的があり、その目的のために仲介という役割を行使しているからである。目的が明確化していることは、仲介の遂行が目的となっていた従来の「子」としての仲介とは大きく差があると言える。仲介があくまで目的への通過点に過ぎないという新たな「子」としての仲介が見られ、そこには仲介という役割を他者に庇護されなくとも、自分の意志で行使・管理・確立できるようになった、仲忠と仲介という役割との関わり方の変化も見られよう。「親」として、また「子」としての仲介も引き受け

る「楼の上」巻は、仲忠の仲介の幅が広がり、仲介のあり方が大きく進化を遂げたと言えるのである。

仲忠は自分が原因で断絶または希薄になっていた人物たちを結びつけ、関係を修復・再構築させた。それによって仲忠を取り巻く人物同士の関係が良好かつ穏便になり、最終的には大勢の人物が仲忠を囲むような形で物語は終わる。仲忠の仲介により展開していた物語は、彼の「仲介」という役割を讃えながら幕を閉じるのであった。

注

- 1 野口元大「霊異と栄誉―「楼の上」の主題―」（『講座平安文学論究第十二編』一九九七年、風間書房）
- 2 岩原真代「『うつほ物語』「楼の上」巻・京極邸の「しつらひ」―仲媒者としての仲忠―」（『日本文学』六〇巻四号、二〇一一年四月）
- 3 三田村雅子「若小君物語の位相―宇津保物語における文脈の差異と統合―」（『フェリス女学院大学国文学会』二一、一九八五年二月）、室城秀之「うつほ物語も表現と論理―うつほ物語における日常性と祝祭性」（『うつほ物語の表現と論理』一九九六年、若草書房）、西山登喜「『うつほ物語』における兼雅の機能―仲忠との関係性をめぐって―」（『物語研究』五号、二〇〇五年三月）など。
- 4 項青「宇津保物語俊蔭巻における異境―仲忠母子の北山のうつほ籠りを中心に―」（『和漢比較文学』一六号、一

九九六年二月)では、木のうつつほについて、森正人(「物語の場」と物語のかたち」『中世文学』三八号、一九九三年六月)の「大木のうつつほが風雨や外敵から身を守るだけでなく、聖なる空間であることを示す例が多い。そこは一種の異界ないし異界への通路であり、変身の装置であり、また神仏の鎮座する空間であった」という論などを参照しつつ、『うつつほ物語』においても北山の木のうつつほが異境として存在すると述べる。

5 武藤那賀子「紙にかきつく—人物関係を構築する文」第五節「差出人と受取人の特定の重要性—関係の明確化」(『うつつほ物語論—物語文学と「書くこと」』(二〇一七年、笠間書院)

6 注(2)論文参照。

7 島田和枝「『宇津保物語』の琵琶」(『広島女学院大学大学院言語文学論叢』創刊号、一九九八年三月)、高野英夫「うつつほ物語 宰相の君母子の物語の意味—楼の上上巻冒頭部を中心にして—」(『中古文学論攷』第二〇号、二〇〇〇年三月)、戸田瞳「うつつほ物語」俊蔭一族と宰相の上親子の織りなす血縁の世界—(縦の繋がり)と(横の繋がり)の絡み合い—」(『古代中世文学論考』第一二三集、二〇一〇年三月)など。

8 富澤萌未「『うつつほ物語』後半部における子ども—前半部との関係から—」(『学習院大学人文科学論集』二四号、二〇一五年一月)では他に、兼雅が俊蔭の娘の弾く琴

の音を聞いて母子のもとにたどり着くのに対して、仲忠も「いと貴はかゆゑゆゑしき声」から宰相の君のいる場所に注意を向けること、どちらの場面も子ども(仲忠・小君)の衣服が奏え綻びている点を挙げている。

9 西本香子「『宇津保物語』の藤氏排斥」(『明治大学大学院紀要(文学篇)』二九号、一九九二年二月)、注(7)高野論文。猪川優子「『うつつほ物語』宮の君と小君—次世代の確執—」(『古代中世国文学』十八号、二〇〇二年一月)では、先行研究を踏まえつつ小君と宮の君の間に摩擦が生じることは明らかだとし、次世代の確執に発展することを指摘する。

10 宰相の上物語が「楼の上上」巻冒頭に描かれる理由について、野口元大「『楼の上上』の世界」(『うつつほ物語の研究』一九七六年、笠間書院)では「国譲下」巻の女二宮をめぐる暴力的な恋争いからの姿勢転換を作者が試みたとし、新たな物語を生み出す時に「蔵開」巻の宰相の上の記述まで戻る必要があると判断したのだと論じる。三上満「宇津保物語「楼の上」の巻の構造と思想」(『日本文学』三九巻一〇号、一九九〇年一月)では兼雅の妻救出譚という話の類同性によって、「国譲」巻で隔てられている「蔵開」巻と「楼の上」巻を結びつける役割を持ち、また、さかのぼって「俊蔭」巻とも結んでいると述べる。注(7)高野論文では、宰相の上物語は俊蔭系物語とあて宮系物語に共通する家族離散を核とした親子の

情愛を描くことで、両系統の物語を結合させる役割を担うという指摘をした。

11 倉田実 『うつほ物語』 仲忠の三条京極邸の庭」(『大妻国文』四六卷、二〇一五年三月)

12 戸田瞳 『うつほ物語』 俊蔭一族と皇室の距離―琴をめぐる思惑―」(『北海道大学国語国文研究』一三八号、二〇一〇年七月)

13 注(12)論文参照。

(付記) 『うつほ物語』 本文は室城秀之校注 『うつほ物語

全』(おうふう、一九九五年)に拠り、本文以下に(巻名・頁数)と表記し、適宜傍線を付す。